開催報告

第18回 あぐりスクール 全国サミット

9月15、16日の両日、「ＪＡ食農教育を振り返り、未来を描こう！～『あぐりスクール』で得られたこと、今後めざすこと～」をテーマに、第18回あぐりスクール全国サミットを開催しました。主な内容を紹介します。

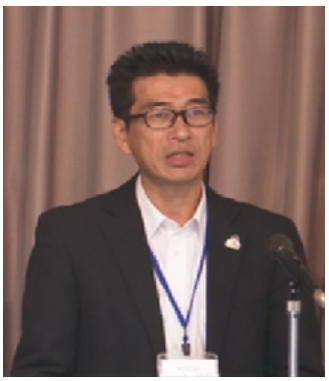
（「あぐりスクール全国サミット」としての開催は今回が最終回）

主　催／あぐりスクール全国サミット実行委員会
事務局／一般社団法人 家の光協会

基調報告

あぐりスクールの変遷と今後の展望

家の光協会　普及文化本部　副本部長　**久保野 剛**



平成10年から15年にかけて通年型のあぐりスクールが次々に発足。17年には、第１回あぐりスクール全国サミットが長野県ＪＡ北信州みゆき（当時）で開催されました（同年、食育基本法が成立しています）。

10年を経た第11回サミットでは、新しいＪＡファンづくりをめざすことを掲げ、食と農の大切さ、関係づくり、ＪＡ事業・活動との連携等を開校の意義として提起。また支店を拠点としたあぐりスクールの開催、親子参加型の増加、プログラムの多様化を通し食農教育の充実を図ることとしました。

「これからのＪＡ食農教育検討委員会」で提言を

ＪＡ食農教育アンケート（令和３年・家の光協会）によれば、職員の人員不足、企画のマンネリ化、参加者や場所の確保等があぐりスクールの課題となっています。ＪＡ食農教育がより発展するには、①ＪＡ食農教育の（大人への）広がり、②ＪＡ組織基盤強化への効果、③期待される地域での総合的な教育機能、の３つがポイントになると考えます。

これらを踏まえ、家の光協会では「これからのＪＡ食農教育検討委員会」を設置しました。ＪＡ食農教育の今日的な意義や目的を再確認し、具体的な取組み内容や強化すべき点を提言としてまとめていく予定です。

実践報告 1

「いただきます」の向こう側を伝える！あぐりスクールの広報戦略

長野県ＪＡ上伊那　総務企画部
部長　**髙橋 英明** 氏
総務課　**今井 智也** 氏

ＪＡ上伊那はＪＡ北信州みゆき（当時）の「あぐりスクール」を手本に、平成18年に現在のあぐりスクールを開校しまし

た。農業やＪＡの理解促進、ＪＡと家族の接点づくり、地域貢献・地域活性化などを目的に取組んでいます。

当ＪＡのあぐりスクールは小学３～６年生を対象に、年９回の授業を実施。クラスの正副担任には２年目以上の職員を選出し、職員の意識を高めるようにしています。

令和４年度は、上伊那農業高校との特別授業で動物、乳酸菌、野菜・果樹、植物・里山の４コースから選択してもらい、高校生と学習。自宅体験学習ではミニトマトやバジルを育て、収穫物を使ったピザ作りを行いました。また、フラワーアレンジやしめ飾り作りをＺｏｏｍで行いました。

広報活動では、ＪＡ広報誌『る～らる』や『日本農業新聞』、ケーブルＴＶで放送する「る～らるコミュニティ」を活用し、対象者別に情報発信を行っています。インスタグラムは、リアルタイムに近い時間であぐりスクールの内容を投稿。保護者に授業の内容を把握してもらうようにしています。あぐりスクールも変えるべきところは変え、新しいものを取り込んでいきたいと思います。すぐに結果に出ることではないので、継続して行うことが重要です。

実践報告 ❷

行政とタッグ！生きる力を育み、里山文化の継承を願う「荒城（あらき）農業小学校」とは？

岐阜県ＪＡひだ　営農推進対策部　部長　**森下 好** 氏

荒城郷まほろば文化村推進協議会は、地域農業・経済の振興のため、ふるさとづくり計画の策定や都市住民との交流促進を目的に行政、ＪＡ全農岐阜、ＪＡひだ、地元関係組織、学校関係等を構成員に設立され、「荒城農業小学校」事業に取組んでいます。

荒城農業小学校は、農業を通じ、児童の健全な成長や地域の文化学習も含め、児童自身の小学校以外の仲間づくりをめざしています。

農業体験や学習、地元の歴史を地域連携で

令和４年度は、計１４回の授業を実施し、児童８０名が参加しました。第１回は、椎茸の菌打込みや収穫、ジャガイモの定植等を実施。第２、３回は、飛騨高山高校の先生と生徒に協力してもらい、田植えと田んぼの生き物調査を実施。第

4、5回は、ニンジン・大根・ジャガイモ・キャベツを収穫し、ＪＡ産直市場アグリ高山店で販売体験を行いました。第6回は、県の農業普及員を先生として、『ちゃぐりん』8月号を活用したお米や野菜の勉強会を実施。第9回は、昔ながらの方法による脱穀体験と、地元の歴史について学びました。

農業の楽しさ・苦労についての学び、里山の文化の継承等を子どもたちや若い親世代に伝えていきたい。農業を通じ、人とのつながりや子どもの成長につないでいきたいと考えています。

実践報告 3

管内2会場で実施！ 地域ぐるみでのスクール開催の秘訣

兵庫県ＪＡたじま　生活福祉部ふれあい広報課　係長　**長田 聡** 氏

あぐりキッズスクールは、①「但馬の農業とＪＡファン」を増やすこと、②若手職員が農業を学び、ＪＡ職員として必要なコミュニケーション能力を培うことを目的にスタートしました。あらゆる地域の児童に参加してもらうため、複数会場で実施。会場ごとでカリキュラムも異なり、基幹作物である米とピーマンは必須品目とし、他の栽培品目は会場ごとに決めています。地元農家には指導を担当してもらい、女性会は調理指導、青壮年部は栽培指導を手伝ってもらっています。

カリキュラムは「プロセス重視型」で

スクールでは、学校や家庭ではできないことを意識して行っています。畑（野菜）の中間管理や調理、収穫などの「プロセス重視型」でカリキュラムを組んでいます。『ちゃぐりん』を活用した座学も取り入れています。

スクールでは、入組2年目職員がスタッフになることを義務づけています。管理職だけではなく、若手職員にも活動への理解が広がっていると感じます。

あぐりキッズスクールを体験した子どもたちからは「農業の大切さがわかった」との声、多くの保護者から高い評価をいただいています。あぐりキッズスクールは子どもたちに農業・食べ物・命の大切さを伝えるのはもちろん、若い世代のＪＡ事業・活動への理解促進にもつながっていると感じます。

家の光協会よりご案内

『ちゃぐりん』を活用しよう!!

家の光協会　ちゃぐりん編集部　編集長　五味千代美

『ちゃぐりん』はＪＡグループの食農教育をすすめる子ども雑誌で、日本ＰＴＡ全国協議会の推薦マークが表紙についています。1964年に『こども家の光』として誕生し、30周年の1993年に新誌名を募集し、チャイルド、アグリカルチャー、グリーンを合わせた名がつきました。

あぐりスクールを企画するとき、『ちゃぐりん』を手に取り目次を開けてみてください。テーマごとにまとめているのですぐに活用したいページを探すことができます。

毎号、「ちゃぐりん　あぐりスクール」というまんがと食農レシピを連動させた8ページ企画を掲載しています。そのままイベントで実践いただける内容としています。

日本の食や農のたいせつさを子どもたちに

日本は食べ物の多くを輸入に頼っていますので、食料の輸入がストップしてしまうと真っ先に飢える国といわれています。食料難をまったく知らない子どもたちに、いま日本が置かれている食や農の状況をぜひ伝えていただきたいと思います。『ちゃぐりん』連載中のまんが「ニッポン！はらぺこ道場」には、そうした知識をたくさん詰め込んでいます。

なるべくたくさんの子どもたちの手に『ちゃぐりん』が届き、生きる力を身につけていただけるよう、地域の子どもたちを育てていただきたいと思います。

ＪＡ新時代のトップの役割を問う

●コーディネーター

東京農業大学　副学長　**上岡美保** 氏

●パネリスト

ＪＡ上伊那　総務企画部　部長　**髙橋 英明** 氏

ＪＡひだ　営農推進対策部　部長　**森下 好** 氏

ＪＡたじま　生活福祉部ふれあい広報課　係長　**長田 聡** 氏

家の光協会　代表理事専務　**木下 春雄**

上岡：各ＪＡの広報活動の工夫を教えてください。

髙橋：ターゲットを絞り、どの情報を提供するかが大事。当ＪＡでは若手職員を広報部門に配置し、企画管理課の課長を中心に内容を確認し掲載しています。またスマートフォンに対応できる職員を広報担当として活用しています。

長田：ホームページをはじめ、昨年度から若い世代向けにインスタグラムなどのＳＮＳ発信に力を入れています。ＹｏｕＴｕｂｅチャンネルは開催日から早めに上げるよう心掛け、あぐりキッズスクールの様子をアップしています。

森下：広報に関しては、荒城農業小学校に通っていた方の口コミで児童が集まっています。

上岡：広報活動において、どのような主体と連携していますか。

髙橋：あぐりスクールの募集は教育委員会、運営は農家や生活部会（女性組織）に協力してもらっています。花を使った情操教育を実施し、行政や本ＪＡの花き部会、ＪＡの３者が協力しています。

長田：当ＪＡでは「コウノトリ育むお米の普及」に取組んでいます。そのなかで、豊岡市と一緒に田んぼの生き物調査を実施しています。

上岡：あぐりスクールの運営は、どの部署が関わっていますか。

長田：事務局は本店のふれあい広報課が担い、会場ごとに担当を設け、支店長・

センター長、支店・営農センターがスタッフとなっています。翌年のカリキュラムは、11月から検討し、次年度開催地の現場の職員と一緒に立案しています。

上岡：あぐりスクールで得られたこと、今後めざすことは。

長田：行政や小学校とつながることができました。若手職員の教育の場としても、農業知識の向上やコミュニケーション能力の向上で成果を得られていると思います。参加者のつながりが中学、高校と続くような仕組みづくりが大切だと思います。

森下：若い親世代も一緒になって体験できたことは重要。単発のイベントではアンテナに引っかかることは少ないので、１年通して実施することが大切です。

髙橋：あぐりスクールの参加者が就農やＪＡに入組しているのは目に見える変化。あぐりスクールの目的達成をめざすためにも、活動を継続していくことが必要です。

木下：食農教育をしっかり実践することで、ＪＡだけでなく、地域社会、国民理解の醸成まで行きつくのだと思います。ＪＡグループが得意とする「食」と「農」で取組むことが、我々の使命だと感じます。

ま　と　め　講　演

ＪＡ食農教育を振り返り、未来を描こう！

～「あぐりスクール」で得られたこと、今後めざすこと～

東京農業大学　副学長　**上岡 美保** 氏

あぐりスクール・食農教育の取組みは大事。ただ、①コンテンツのマンネリ化、②募集しても集まらない、③成果が見えず評価されない、の３点が課題となっています。

プログラムのマンネリ化を防ぐためには、部署内外・地域等との協力・連携が不可欠。対面とデジタルを組み合わせる多様性は、巻き込めなかった人を巻き込むきっかけになります。「教育事業」だけでなく「ＪＡ広報活動」であるという視点の転換も必要です。さらに職場環境が、「心理的安全性」が高く役職員関係なく開かれている「オープンマインド」であることが必要。若手職員の意見を取り入れる「リバースメンタリング」も重要な要素です。

若手活用し地域の人の“得意”も活かしてほしい

デジタル活用のポイントは、ＳＮＳの活用などへの若手職員の起用があります。新たな取組み手法の導入と若手職員の自信とやる気、職場での存在感の実感につながります。また他部署・他団体・地域などの部署内外での連携・協力体制を構築し、地域の人の“得意”も活かしてほしいと思います。

ＪＡの食農教育は、エシカル消費ができる次世代や農林水産業に関わる次世代の育成ができると感じています。食農教育には正解がありません。地域によって性質が違うからこそ、自由な発想や方法で取組むことが大切です。

● 現地視察・実践報告

２日目は、ＪＡマインズ（東京都）が平成30年度から展開している「アグリ体験塾」を視察研修した後、同ＪＡの池田晃次営農指導課長よりＪＡマインズ食農教育事業について実践報告をいただきました。

東京都ＪＡマインズ　地域振興部営農指導課　課長　池田 晃次 氏

ＪＡマインズでは、農地の利用をめぐって次の３事業を行っています。

第１に貸出農園事業。市民農園「ＪＡマインズふれあいファーム」を平成27年から順次開園しており、組合員から農地をお借りしながら現在10農園を運営しています。

第２にマッチング事業。令和元年から、都市農地貸借円滑化法に基づく組合員同士の農地貸借を支援しており、累計で29件、約3haのマッチングが成立しています。

親子対象の「アグリ体験塾」を１家族１区画で

第３に、今回のテーマである食農教育事業です。地域住民に農業を身近に知っていただくため、現在、16か所１万3371㎡の農地をお借りして運営しています。

農業者や青壮年部が指導者となって、地域の小・中学校、幼稚園・保育園からの依頼を受けた食農教育事業や、中学生の職場体験も行っています。

「アグリ体験塾」は、平成30年度から本店主導で行っています。現在、管内在住の親子を対象に５～11月の年間全５回、１家族約12㎡の区画で栽培・収穫体

験を行っています。栽培するのは、枝豆、トウモロコシ、サツマイモ、ジャガイモ、ダイコン、ハクサイなど10品目以上。コロナ禍以前は収穫祭も行っていました。

家族ごとの区画分けは、コロナ以降にソーシャルディスタンス対策の一環で始めたものですが、子どもたちに看板を書いてもらい飾ることで、愛着を感じ“自分の区画”という自覚を持ってもらいました。これにより体験塾開催日以外にも訪れて、畑の手入れをする姿が見られるようになりました。

今年度は、ボランティアも指導に参加いただけるようにしました。今年度ＪＡとして新設した体験型農園「とも畑」の利用者の皆さんです。「とも畑」開園のきっかけは、地域で体験農園を営み約20年間指導してきた園主が逝去し閉園が決まったこと。その利用者からの「ＪＡの力をお借りし近隣の畑で体験農園を続けたい」との強い要望を受け、ＪＡマインズ初の体験型農園開園につながりました。アグリ体験塾の畑の近隣農地を借りることができ、約20年農業体験を続けてきた利用者に、アグリ体験塾のボランティアとして参加してもらうことを条件に「とも畑」利用を呼びかけたところ、7割以上の人が賛同し利用者となったのです。アグリ体験塾当日には一所懸命指導を行っていただき、多大な貢献をいただいております。土日開催となることからＪＡ職員の配置上も非常に助かっています。